特集 シリーズ《JR考⑥》石狩沼田―留萌間 来春3月廃止

消えた沿線を歩く

存続の夢 留萌線

JR留萌線の石狩沼田―留萌間（35・7キロ）が、来年3月末をもって廃止されることが決まった。残る深川―石狩沼田間（14・4キロ）についても、3年間の猶予が与えられたものの、26年3月末に廃止される見通しだ。留萌線は2016（平成28）年12月に留萌―増毛間（16・7キロ）が姿を消しており、10年の間に3度の〝戦力外通告〟を受け、1910（明治43）年からの長い歴史に終止符を打つことになる。全国からのファンが集う沿線を歩き、鉄道存続に最も熱心だった沼田町役場を訪ねた。

（フリーライター・内海達志）

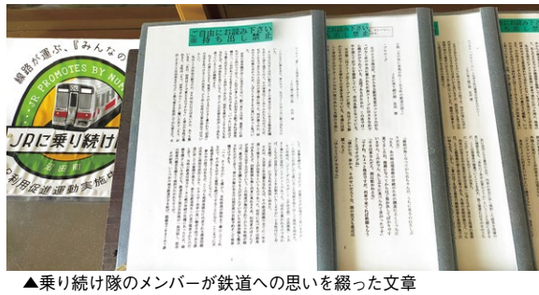
鉄道愛が強い沼田町

JR北海道が「単独では維持困難」とする路線の廃止が粛々と進められている。2019（令和元）年に夕張線の新夕張―夕張間、2020年に札沼線の北海道医療大学―新十津川間、2021年に日高線の鵡川―様似間が相次ぎ廃止に。根室線の富良野―新得間もバス転換が決定的だ。

ちなみに、今年は札沼線の石狩沼田―新十津川間の廃止（72年6月）から50年目に当たる。沼田町にとっては、再び鉄路の廃止と向き合う辛い夏となった。

今回、廃止を受け入れる合意書に沿線2市2町（留萌市、深川市、沼田町、秩父別町）の首長が署名したわけだが、鉄路存続への思いに温度差があったことは言うまでもない。なかでも留萌市は、存廃問題を話し合う検討会議から早々に離脱しており、存続に最も熱心だった沼田町との意識の乖離は埋め難いものがあった。まさに〝路線〟の違いといえるが、留萌市の場合は通学需要が限られているうえ、札幌へのバス便が充実していることもあり、鉄道を失う影響はほぼないといっていいだろう。

一方、予想された結末とはいえ、沼田町の



▲乗り続け隊のメンバーが鉄道への思いを綴った文章

失望は大きい。単に「廃止反対」を唱えるだけではなく、コロナ禍の逆風が吹き荒れるなか、さまざまな独自の取り組みを展開してきたからだ。

その一例を紹介すると、この2年間だけでも、町内の小中学校に在籍する児童・生徒、教員などを対象にした「運賃助成」、恵比島駅前の「中村旅館」を開放して特産品販売を実施した際、来場者に対して深川までの切符を配布した「また来てね切符」、恵比島駅周辺にノースサファリさっぽろの移動動物園と松尾ジンギスカンなどのキッチンカーを招いたイベント「あしもいどうぶつの森」、ファンに人気の鉄道雑貨店「ぽっぽ屋」が恵比島駅でイベントを開催した「明日萌駅冬フェスタ」――と、精力的に動いてきたことがわかる。

このほか、列車の乗車体験がほとんどない子どもたちに鉄道に愛着を持ってもらおうと作成した「JR乗り方冊子」（町内の全小中学生に寄贈）、石狩沼田駅舎内でのクラフトビール醸造計画といったユニークな活動も。2020（令和2）年2月に募集を開始した「JR乗り続け隊」は、今年8月29日時点でサポーターである隊員が683人に達した。

駅や路線を維持するため、これほどアイデアを打ち出している道内の自治体は他にないだろう。その沼田町役場を訪ね、産業創出課の赤井圭二課長に話を聞いた。

「廃止やむなし」の声

町は再三にわたり、住民説明会を開いてきた。

「昨今のコロナ禍や、誰の目にも明らかな高齢化による利用減などを踏まえ、残念との声はありましたが、極端な反対意見は出ませんでした。諦めというより、『将来に向け、しっかりとした公共交通を確保してほしい』との要望が多かったですね」

この冬、留萌線は運

（本文は32頁へ続く）

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）